



シリーズ 子どもたちの発達

『構造遊び』

子どもが長く使い、遊ぶものの道具のひとつに「積木」があります。

その遊び方も様々で、ほんの赤ちゃん時、何かを手を持てるようになった頃には、口に入れようとしたり、振り回したりします。少しすると、両手に持った 2個の積木を打ち鳴らすようになり、また、何かの容器に入れるようになり ます。やがて、積木を並べたり、重ねたりするようになり、2 歳ごろになると、家や道路・街などを見立てていろいろな「モノ」を作るようになっていきます。

このように、幅広く、創造しながら遊ぶものに積木やブロックなどの道具が あります。重荷、この積木やブロックを使って、積んだり並べたりあるいは物 を構造し作る遊びを、私たちは『構造遊び』と呼んでいます。今回は、子どものする構造遊びについて考えていきたいと思います。

まず、構造遊びの中で、子どもが何を知り・学び、何を育てようとしているのか？！ということについて話していきたいと思います。

2歳くらいのお子さんをお持ちの方なら、ブロックや積木を使って一緒に遊んだ経験があると思います。また、そうでない方も、自分が積木やブロックを 使ってどう遊ぶだろう？と想像してみてください。積木なら、高く積み上げてみたり、間隔をあけて並べ、ドミノのようになしたり。たくさん積木があったら、大きなお城で作ってみたり、また、自分の周りに囲いを作って家にしてみることもするでしょう。小箱サイズの、少し大きめの積木なら、車などに見立てて乗り物を作って、そこで運転手になる遊びをするかもしれません。

大人がそうした「モノ」を作れるのは、頭の中で作りたいものの具体的なイメージがあり、そのイメージに基づいて道具を使って構成しようとする力があるからです。また、立体物を構成するためには、平面だけの認知ではなく、奥行きや距離感などの空間の認知が必要ですし、色

の配色や形の認識、バランス 感覚、手先の器用さなども必要になってきます。つまり、構造遊びの中には、それだけの学習要素が含まれているのです。

しかし、これらの複合的な要素をもった構造遊びは、ある日、突然できるようになるものではありません。それは、冒頭でも少し触れましたが、ほんの赤ちゃんのころから始まっています。

たとえば、物を持つということ。

積木を並べる・重ねるといった単純な操作も、物を上手に持てることがあってできることです。赤ちゃん時代は、この、物を握る・離すということを繰り返します。握って離すことが、自分の体をコントロールすること、力の加減、手全体の動きだけでなく指先の器用さを育てます。この動作が上手くできないと、目的のところに積木を置くことは、なかなか難しいものです。握る・離すという行為を、どれだけ赤ちゃん時代からしたかということも影響してきます。

よく、1歳くらいでは、自分の持っているものを「ハイ！」と気前良くくれる素振りをするのに、実際には手渡ししてくれないという子どもの姿があります。これは、決して、大人の発送でいう「ケチ」なのではなく、上手くタイミングをとって相手の手に渡せないことが多いのです。そのような時は、「ありがとう！」と言いながら、こちらから子どもの手に持っているものを受け取ってあげるなどを繰り返す遊びを、たっぷりしてあげると良いでしょう。

しかし、ただ握る・離すという行為ができるだけでは、物を上手く積み重ねていくことは難しいです。自分の目的とするところに上手くのせられるという、目で見て手を動かす体のコントロールが必要となります。ただ目で見て認知するだけでは、目的のところに物は置けません。距離感もありますし、力の加減や腕から手・指先にかけての動きが、目で見たものと連動したスムーズな動きとして、初めて成り立つのです。子どもが赤ちゃんの頃にする、両手で持ったものを打ち鳴らしたり、入れ物に入れようとする遊びは、この、目と手の連動したスムーズな動きを育てます。物と物が上手くぶつかなければ音はしないし、入れ物に入れるときは、その入り口に運ばなければ入ってはくれません。子どもは、目的を達成するために、繰り返し繰り返し遊び、その中で目と手の連動したスムーズな動きが育ちます。

また、積木を積み上げるということは、全く違った形のものや、平面でないものでは面と面を合わせたり、同型のものでないと、高く積んでいけないという物と物の関係を知ります。なので、遊びの目的を達成するために、子どもは同じものを分類をしたり、形を認識しようとします。物の形を知ることこそそうですが、高く積む、長く並べていくということは、高さ(高一低)、長さ(長一短)ということも知っていきます。これらの赤ちゃん時代の遊びがあって、ものを構成したり構造したりする遊びへ繋がっていくのです。まだまだ赤ちゃんで、積木などを使うほどではな

い月齡の子どもたちの遊びが、そうやって繋がっていくと思うと面白いものです。

保育室では、子どもが身体の機能や、そういったものの認識が十分できる（遊べる）ように道具をそろえることはもちろんですが、空間についても、十分に満足できるようなスペースを確保するように努め、高くしたり長く並べたりできるようにしています。家庭ではなかなか無理なことと思いますが、ちょっとテーブルを寄せたり、少し広さを取ってあげると遊びが違って来るかもしれません。

更に、子どもがこの道具を使って「～したい！」「～を作ってみたい！」と思ったときに、量や種類についても考える必要があります。まだ小さい子どもに、箱いっぱい積木やブロックを与えても使いきれなかったり、散らかし遊びになることがあります。逆に、2～3歳の大きな子どもに、少しだけの積木ではちょっと重ねて終わってしまい、物足りなく感じることでしょう。なので、子どもの遊びによっては、量の加減を考えて出すことや、積木の大きさなどもその子の能力に応じた扱いやすいものを出すことを考えています。家庭では、何種類もの積木やブロックを用意することは難しいと思います。積木とあわせて、空き箱や牛乳パックと組み合わせてみたり、サランラップの芯を切って出してみたり、組み合わせにバリエーションを持たせるとその形の違いなどから、その子ならではの発想をしたり遊びが変化し、子どもも楽しめると思います。

子どものしている遊びをじっくりと見てみると、今、何をしているのかな？！何をしようとしているのかな？！ということが見えてきます。そんな興味を持って子どもの遊びを、一緒に楽しんでみてください。

柏市駅前認証保育園 Kid's Encourage
園長 日下部樹江

